



twitterに掲載した140文字の小説集。

橘 ひろ代
@hanani_somuite

月の意味

満ちたり、
欠けたり、
ほんと人生みたいだね。

月が地球を見守っていることにも、
素敵な意味があるように、思えてならないんだ。

隣に君がいることに、
僕が素敵な意味を見いだすように。

僕のもの

あの頃は確かに覚えていた、
電話番号がもう思い出せない。
顔だってもう鮮明じゃない。

そんな風に、僕は君のことを忘れていく。

それでも、
君の番号を押した時の、
君の顔を見た時の、
胸のキュッとする幸せは、
きっとずっと、
僕のものだ。

希望の道

君のために、絶望のカケラでブローチを作ったよ。

君の哀しみは、今ここに完結する。

だからこれからは、自信だけを両手に抱えて、

希望の中を歩いて行くんだ。

胸に輝くブローチは、

消えない代わりに、

もう暴れ出したりはしないだろう。

氷

私には私の人生があって、
たまたますれ違った人にも同じく人生があって、
隣の席でコーヒーを飲んでいる人にも、
あの店員さんにも、
小さな子どもにもあって。

その無限かとも思われるような拡がりに、
くらくらと思いを馳せる。

手元で氷が音を立て、
確かな感触へと導く。

ただいま、私。

有限の

永遠のことに思いを馳せると、
気が滅入りそうになるから、
僕は限りあるようにものを見る。

例えば、
あと5分で君の不機嫌は終わるだろう、とか。

主人公

私が誰かの脇役でられないように、
誰も、
私の脇役ではられない。

どんなに好き合ってもそれは、
君が主人公の物語と、
私が主人公の物語が、
ひととき交錯するにすぎないの。

だからこそ、
大切だし、
だからこそ、
人はひとりだね。

神さまの愛

些細な事で怒って泣いて、
そんなことをもうどれだけ繰り返してきたらう。

私が愛そのものになるなんて、
到底無理だわ。
それが出来たら、神さまだもの。

一生届かないけれど、
その光は確かに見てとることができる、
夜空の星のようなものなのね、愛はきっと。

だから祈ろう、今夜も、星に。

景色

どうして別れることになったのか、
今はもう定かではない。

それなのに、
君が振り返った岬や、
君が俯いた夜景に立つと、
胸が締め付けられる。

新しい女性を愛した、
今でさえ。

ちゃんと

旦那の誕生日。

今日は、うんと優しくしてみる。

手料理はいつもより愛情込めて。

いつもは怒ることも笑顔で許して。

プレゼントには感謝を添えて。

すると不思議と心が晴れて、

彼の顔も輝いている。

なんだ、簡単なことだった。

時々でもいいから、

ちゃんと、

愛せばよかったんだ。

急に知らない人に思えるときがあるよ。

目の前の君が、

突然いなくなったみたいな気がして、

とてもこわい。

でもきっと、

君は何も変わっていないくて、

僕の中の何かが、

君をとらえ損ねているのだろう。

それが果たして何なのか、

僕は知らなければならない。

僕らがつくる未来

昔を懐かしむのはいいけれど、
帰りたいなんて、
ちょっとヒドイじゃないか。

君と、一緒にここまで来た僕。
常に“いま”であり続ける僕。
それを否定するの？

もっと行きたい場所があるなら、ね、
それを僕に教えて。

過去に帰すことはできないけれど、
一緒に未来をつくる事はできるんだ。

天使

「幸せなふりをするなよ」
はっとする君の一言。

恵まれている、
だから幸せでなければならない...なんて、
私は誰に言い訳していたのだろう。

ようやく気付いてもらえたとばかりに、
本当の幸せが咲き誇る。

それを一輪、君に渡す。

君は役割を終えたかの様に、
私の前から消えてしまった。

粗暴な人

粗暴な振舞いの人が出た。
きっと自分の命にも、
同じような振舞いをしているのだろうな。

それでも貴方は、
毎日が当たり前と思って生きている。
当たり前と思える事が、既に奇跡なのだから、
貴方は本当は幸せな人だ。

でもどうか、
貴方に宿った命の事も、
幸せにしてあげて欲しいと、
僕は願う。

ネックレス

「LOVE」と書いたネックレスを身につける。
愛をいつも忘れたくないから。
変わらずそこにあるものは、忘れてしまうのが常だけれど。

それでもね、鏡に映る自分を見たとき、
いつも愛と共にあったってことを、
思い出せるのはちょっと幸せなの。

川の流れは一方的だ。

だからといって川の水は“海へ与えているばかりだ”と怒ったりはしないし、海は海で“川から受けとるばかりだ”と自分を卑下したりもしない。

それはお互いに、
本当は空で繋がっていると、
知っているからなのかもしれない。

僕と君も、
同じだって思わない？

化粧

バラの香りのクレンジングで、
純白のコットンに写しとる。
肌色のファンデ、
黒いマスカラ、
ピンクのシャドー。

表れた素顔に浮かびだすのは、
今日の後悔や怒り、明日への不安達。
絹泡と一緒に水へ流そう。

そして朝、私はまた化粧をする。
今日一日の希望と愛と、戦闘力を込めて。

水

もしもプランターの花が、
「私はひとりで生きていけるから」と言って、
人間の与える水を拒否したら、おそらくは枯れるだろう。

君の愛を恰好つけて拒否した僕も、
枯れてしまいそうだ。

それでも生きていかなければならない僕は、
一体何にすがればいいのか。

ガラスのような君

「人生は、美しいものだけ覚えていればいいんだよ」
そう微笑む君の手は、美しいガラス細工をつくりだす。

汗だくで、
火傷と隣り合わせで、
ススにまみれて。

「そんな君が美しい」
なんて言えなくて、
君の作ったガラス細工をただ愛しくもてあそぶ。

輪郭

身を削り合う恋だった。
足りないところを補うだけでは飽き足らず、
より完全な、“ひとつ”へとなりたくて。

それゆえに、
離れるにはお互いにぼろぼろになるしかなく、
友達になんて戻れるはずもなかった。

それでも今は感謝している。
“自分”という輪郭を、
教えてくれたひとだから。

祝福

花瓶の花束に夕日があたる。
いつもなら見過ごしていただろう景色。

「ありがとう。」

母の日でもない。
父の日でもない。
自分の誕生日に言えた時、
人生は革命的に美しくなるということに、
俺は今日、
はじめて気づいた。

革命

ひとつ、
髪はカラーゴムで結ぶこと。

ひとつ、
スカートを2回折って短くすること。

ひとつ、
勉強もちゃんとすること。

ひとつ、
好きな人にがんばって話しかけること。

14才、夏のレボリューション計画！

「最後に...」

そう言って彼にキスをした。

いつもなら、
すぐに次の男で上書きしていたけれど。

でもこのキスはなくさない。

本当に愛する人ができるまで、
大切に、
とっておくんだ。

心を求めた言葉

“心ない言葉”は心を求めた。

柔らかい心を見つけると、
彼はそれをぎゅっと掴む。
助けて欲しくて力の限り。

でも心は苦しそう。

「ぼく悪い事をしたのかな。心が欲しいだけなんだ」

心の持ち主は、そっと彼を撫でてやった。
彼の手からは力が抜け、
かわりに小さな寝息が聞こえた。

七夕の心

貴方は気付いてる？

私達が毎年こうして会えるのも、
人が恋の為に流した涙が、
星となって道を成すからだということに。

喜びの星も悲しみの星も、
今夜は川に架かる美しい橋へと姿を変えて、
二人を引き合わせてくれるの。

そんな星たちの主の為に、
今夜は素敵な恩返しをしなくてはね。

七夕の星

少女は眠れずに膝を抱え、
少年は眠れずに窓辺にもたれた。

涙が溢れ、空が滲む。
二人は同じ星に同じ事を祈った。

「いつか、自分を必要としてくれる人に、出逢えますように。」

星は瞬きそれに応える。
二人は程なく出逢うだろう。
同じ願い事をした七夕の、
眠れぬ夜の思い出を合図に。

私の中のワタシ

彼女は、絶対に私の味方だ。

心傷つく場面では私をかばい、
その怒りをなだめ、
悲しみを手放す事を手伝い、
私が笑顔になるアイデアを提案してくれる。

しかし、彼女に実体はない、
私が生み出したもう一人のワタシ。

今日もワタシは私の味方。
一番の理解者で守護者で、
夢幻。

最後のプレゼント

君は今頃何をしているのだろう。
それを知る術はもはやない。
でも、知らなくてよかったと思う。

もしも落ち込んでいると知ったら励ましたくなってしまうし、
笑っていると知ったら何に心を奪われたのか気になってしまう。

知らない、
という事はきっと、
君がくれた最後のプレゼントだね。

仮想と素顔

パソコンの電源を落とす。
真っ暗な画面に、ぼんやり映る素顔の自分。
さっきまで着飾っていた私はもういない。

独りに帰り、
本音を隠した事を少しだけ後悔する。

ぬるくなったビールを一気に飲み干し、
暑さと虫の声に身を任せる。

明日はもっと素直になろう。
画面の私も、愛せるように。

裸

私が三つ目のボタンに手をかけたとき、
彼はようやく覚悟したようだ。

私が服を手放すように、
心の枷を手放すと。

月食

夜空に浮かぶ朧月は、
恥ずかしそうに俯いた。

強すぎる太陽の照明を背に、
地球は月へと影を落とす。
引かれ合っている彼らに言葉はいらない。

お互いの存在を確かめ合う、
奇跡に満ちた束の間の儀式。

そして近づく別れをただ静かに受け入れ、
またそれぞれの輝きを見守る夜が続いていく。

宝さがし

ただのデータの集合であり、
ただの文字列であり、
ただの言葉。

でもひとはそこから心を抽出する。
それは相手の心のこともあれば、
自分の心のこともある。

あなたからのこのメールには、
どんな気持ちがこもっているのだろう。

私が打ったメールから、
あなたは何をみつけてくれるだろう。

受容

「構ってちゃん」

私の手首を見た人は大抵そう罵る。

無理もないか...

自嘲する私が一番、私を無視して傷つけてきた。

怒ってない、

悲しくない、

寂しくなんてない...

そうって、

感情の責任を全部手首に背負わせた。

もう嘘はつかない。

どんな気持ちも受け止めるよ。

全部私の、一部として。

夏至

夏に至ると書くのに、
今日から昼は短くなるばかりなんて、なんだか悲しい。
しかし北欧では夏至は恋の祝祭日であるという。

...そうか、これからが夏の恋の季節。
暑い熱い夜の季節だ。
それなら今日は、さながら前夜祭。

明るい内に仕事を終えよう、
街はこれからお祭りなのだから。

僕の父の日

押し量らなければわからない愛情はつらい。
それが親の愛であれば尚更だ。

しかしそれが、子供の役割だと言うならば、
今日くらいは引き受けてやろう。
不器用な父の、その真意を見つめよう。

いつも...ありがとう。
煙草、吸いすぎるなよ。
酒、飲みすぎるなよ。
母さんには、優しくしろよ。

未来への香り

学生の頃よく使っていた香水を、久しぶりにつけてみた。
懐かしい光景に瞬時にタイムスリップして、
幸せな気持ちになった。

でも同時に、
あの頃はもう二度と戻らないのだと、
ちょっとだけ悲しくなった。

これからの為の、
新しい香りを身につけよう。

今を懐かしむ、未来の自分の為に。

内的世界 男の場合

男はしばし立ちつくす。

(愛しい...

本当はきつく抱きしめてしまいたいほど...

でもだめだ、きっと傷つくことになる...

傷つくことも、傷つけることも...

もうたくさんだ...

でももっと繋がりたい...

この気持ちは見なかった事にしてしまいたい...)

無言で携帯を閉じ歩き出す。

女はしばし立ちつくす。

(悲しい...

けれど、悲しみに任せて行動してはダメ...

悲しみを眺めつつ流れ去るのを待つ...

そうすれば、

自分の主導権を、感情に握られずにすむ...

待つよ、ただひたすら...

眺めるよ、ただ黙って...)

無言で携帯を閉じ歩きだす。

ナイト

僕は信じていた。
君が再び生きる勇気を持ってくれると。

だから
「あなたが生きている間は負けないことにしたよ」
そう言われて張りきった。

君はよく闘ったね。
僕はもうすぐしおれるけれど、本望だ。
退院おめでとう。
そして毎日水をありがとう。
愛していたよ。

君だけのガーベラより。

「感情は、花のようにひっそり咲いてはくれないよ。
なかった事にされたら、自己顕示しようと暴れだすんだ。

だから認めてやればいい。
認めてやるだけでいいんだ。
後は放置したって構わない。

勝手についてきたり、
いつの間にかいなくなったりしているさ」

花屋の軒先。
いつかの雨宿り。

愛発散

「アイドルなんて、手が届かないだろ。好きになっても無駄じゃない？」

「みんな、愛の発散してるのよ」

「へえ、愛って、ストレスみたいに溜め込むとよくないんだ？」

幸せなまぶた

「目を閉じる時はいつでも、一番大好きな景色を思い浮かべるのよ、
そうすれば、落ち込んだ時や眠る時に、
目を閉じるだけで幸せな気持ちになれるからね」

私がまだ小さい頃、
おばあちゃんはそう教えてくれた。

今、おばあちゃんはきっと幸せだよね。
幸せで、いてくれるよね。

泡

失礼な店員がいた。
冷静に抗議ができない俺は、
煮えたぎる腹を押さえて家に帰った。

しかし苛々は収まらない。
乱暴に荷物を放り投げる。

シャワーで汗を流した後、
ビールを買ったことを思い出し、景気よく開ける。

飛び出す泡を浴びながら、
もう小さなことで苛々するのはよそうと決めた。

カムフラージュ

「蛙はどうして鳴くのかな」

ただ通り過ぎて行くだけの夏に、
自分の存在をしらしめたいんだよ。
俺がお前の人生に、
かけがえのない足跡を残したいのと同じように。

「そりゃあ求愛だろ」

「え〜」

こうして笑い合う無邪気さは、
真剣すぎるお互いへの気持ちを隠す、
カムフラージュなんだ。

結婚式

「いよいよ明日か」

「そうね」

「晴れるといいな」

壁に掛ったウェディングドレスを前に、
二人は微笑む。

翌朝、穏やかな日差しが二人を包み、
教会へと向かう足も軽い。
ジューンブライドはこれで三度目だ。

二人は思い出のドレスをそっと手渡し、
自らの孫娘へと。

私へ届け

「愛してるよー！」

空に向かって大きく叫んだ。

この地球を一周して、
自分の背中へと、届くように。

綿毛

「ねえ、綿毛が天使に見えたよ」

「それで？」

「綿毛が天使に見えたんだよ」

「そう、良かったね」

「...綿毛が天使に見えたのに」

殻

自分の殻に閉じこもってちゃ、
悪い所も出ないけど良い所も出ないぞ。

そう言って励ましてくれた彼は一年後、
愛が重いと離れていった。

何もかも閉じこめておけば、彼は離れなかった？
きっと、結局、離れたよね。

閉じこもったままでは、
愛を表現することすらできないのだから。

ひとりと...

彼も同じ月を見ているだろうか。
こんなに近くにいるのに遠い。
薬指に指輪があるだけで。

ひとりフランス産のワインを開け、
「会えないならフランスにいても同じだね」
そう自嘲してグラスに口づける。

それでも、同じ夜風を浴びていると思うと嬉しい私は、
きっと酔っているのだ。

星のかけら

僕たちは昨夜一緒にそれを見た。
遠くの星から帰ってくる惑星探査機を。

「もし本当に砂とか入っていたら、感動だなあ、
科学的にも凄いけど、やっぱりロマンだよなあ、
星のかけらだよ？」

そんな僕に、
足元の小石を拾って彼女は言った。

「これだって、星のかけらだよ」

愛の形

正直興味がなかったんだよ。
宇宙なんて一生行かないし、
衛星さえ浮かんでいてくれればいいって。

でも、君が美しく燃え尽きるのを見て思った。

過酷で果てしなくて、人間を軽々しくは寄せ付けない。
そんな宇宙に対する、
これが人間の、
切実な愛の形なんだ、って。